

＜スタッフ紹介＞

役 職	スタッフ名
部 長 兼周産期センター新生児医療センター長	山本 昌周
医 長	立石 美穂
医 長	三原 聖子
医 員	浦上 裕行
非常勤医員	住田 裕
非常勤医員	辻田 麻友子
非常勤医員	田上 利樹

＜特色と概要＞

2025年度診療スタッフは、新規採用の常勤医1名に加え、常勤医3名、2024年採用専攻医1名を含めた非常勤医3名の計7名で運営を開始した。日本小児科学会の専攻医研修制度変更後9年目となるが、新たな専攻医の採用はなく、大幅な欠員状態が継続している。

当科は、基幹病院である大阪大学小児科の関連施設であり、小児科専攻医(初期研修2年を終え卒後3年目以降の小児科専門医取得を希望する研修医)が基幹病院研修プログラムに沿って研修を進める過程で補完施設という位置付けである。2024年に新たに就任された大阪大学小児科教授のご尽力により大阪大学小児科専攻医研修プログラムへの応募人員が大幅に増加しているが、大阪大学立地が北摂地域であり、泉州南部圏域に立地する当科を研修先として希望する専攻医が少ない状況が続いている。

小児科外来診療において、人員減、働き方改革による時間外勤務制限の影響で、午前一般診は3診体制は維持不可となり、午後の時間外外来紹介、救急搬送にも不応需とならざるを得ない日程が増え、地域小児医療への貢献を減じる結果となっていた。これを打開すべく、2024年秋より小児専門医1名、小児神経専門医1名を新たに応援医師として中途採用し、午前3診体制、神経外来再開を図った。

また、午後診療は、各担当医による慢性外来、専門外来として循環器外来(第2金曜予約制)、神経外来(毎週金曜午後予約制)、生後2週及び1ヶ月健診、予防接種業務を行っている。RSウイルス流行期間中(2024～2025年シーズンは当センターでは3月から7月までを設定)の第1、3金曜日にハイリスク児に対して、抗RSウイルスモノクローナル抗体として従来のシナジスに加えて長期作用型製剤であるベイフォータスを投与している。又、当院NICUを退院した超低出生体重児を対象に、臨床心理士による新版K式発達検査を泉佐野市子育て支援課のご協力により、定期的に継続しているが、年々検査対象者は減少している。

泉州南部圏域小児救急医療体制においては、2006年11月開設の泉州北部小児初期救急広域センター出務(年5回)、2014年4月移転した泉州南部小児初期急病センター(旧泉佐野・熊取・田尻休日診療所)出務(毎月3回)を通し

た一次救急診療業務に加え、各地域病院(和泉市立総合医療センター、泉大津市立周産期小児医療センター、市立岸和田市民病院、岸和田徳洲会病院、市立貝塚病院、りんくう総合医療センター、阪南市民病院)により構築される二次救急輪番体制に参加することで、中断のない小児救急診療連携に携わっている。2022年度より大阪母子医療センター救急科が新たに輪番体制に加わったが、泉州圏域の各市民病院での小児科人員減少、地域開業小児科医減少により、泉州圏域における小児救急診療体制維持が年々困難となっていた。2022年度末から泉州小児救急輪番体制運営委員会が発足、各自治体母子保健グループ担当及び大阪府地域保健課母子グループ担当も加わり議論を重ね、当院松岡理事長(前院長)のご尽力を仰ぎ、2025年7月に泉州救急懇話会小児救急部会が発足、泉州圏域における小児救急医療体制の充実強化を推進することを目的に、医療機関、市町、消防機関及び医療関係団体の間で協議を継続している。

地域小児保健においては、市町村乳幼児健診に出務しており、泉佐野市4ヶ月児健診に年12回、熊取町4ヶ月児健診に年6回、同町1才半健診に年4回、泉南市二次健診に年6回出務している。2024年度より派遣中止となっていた田尻町5ヶ月児健診及び泉南市4ヶ月健診へも派遣再開となった。市町村乳幼児二次健診への従事医師不足解消策の一環として、2016年4月より合同二次健診(すこやか健診)を開始している。泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町の2市2町に居住する二次健診対象者を、りんくう総合医療センター隣接の健診会場(教育研修棟2階サザンウィズ)に集め、医師3名(当科より2名、医師会より1名)、地域保健師、助産師、看護師、栄養士、当院事務担当の協力を得て、月1回行っている。また、主に当センター出生児を対象に定期接種、任意接種を行っている。定期接種委託契約は貝塚市、泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町、阪南市、岬町である。BCG、子宮頸がんワクチン及び3歳以上の定期接種は対象外としている。当院小児科は院内診療業務に留まらず、地域小児医療・地域小児保健事業に積極的に携わっている。

＜実績＞

2023年5月に新型コロナウイルスが本邦感染症法上「5類」扱いとなり、WHOの緊急事態宣言終了を経て社会・経済的なパンデミック終焉を迎えて2年が経過し、市民の社会及び経済活動はコロナ禍以前のレベルまで復活した。

当科における外来・入院診療実績は、2023年度、2024年度と徐々に回復の兆しが見えていたが、泉州南部圏域の小児人口減少の影響を受け、2025年度は減少する結果となった。

小児外来診療において、年間外来受診延べ患者数(2週健診、1ヶ月健診、予防接種を含む)は7,453人(輪番救急外来受診患者を除く)、月平均621人で、コロナ禍前年2019年度11,299人、月平均942人に比べ66%減少までの回復で、コロナ禍終了後2年目の2024年度8,745人、月平均729人に比べても85%と減少しており、コロナ禍3年間に周辺小児人口減少が加速度的に進んでいる影響が考えられた。

小児救急診療において、当科人員減少を考慮しコロナ禍中の2022年度より泉州南部小児救急輪番担当回数を月2回から月1回としたため、2022年度受診者総数は166人と大幅に減少した。2025年度は172人と、2019年度506人、2021年度242人、2024年度191人から、担当回数1回当りの受診者数は、2019年度比で32%減少、2021年度比で29%減少、2024年度比で3%減少となった(表1)。

小児入院診療については、一般小児入院患者数は延べ102人、コロナ禍前年2019年度270人に対して62%減少、コロナ禍終了後1年目の2023年度115人に対して11%減少、2年目の2024年度124人に対して18%減少と同様に減少傾向が持続している。担当回数月1回となった小児救急輪番経由入院児数は10人/12回で、担当回数1回当りにすると、2019年度45人/24回に対して56%減少、2024年度15人/12回に対しては33%減少した。小児救急輪番経由入院児数が延べ入院患者数に占める割合は9.8%(10人/102人)で、2019年度15.0%、2021年度0.8%、2023年度7.0%、2024年度12.1%とコロナ禍前後で15%から10%前後に減少している。

<今年度の成果と来年度への抱負>

小児外来入院診療及び救急診療において、コロナ禍に大きく影響された2020年度、2021年度から、コロナ禍前の

実績に回復する兆しが見えつつあった2023年度、2024年度を経て、2025年度の外来入院診療実績は、一転して再び減少する結果となった。コロナ禍前後を通して外来及び入院患者数は2024年度と比べ15～20%減少した。コロナ禍終息に伴い、保育及び学校環境の復帰、感染予防策緩和、受診控えの減少などにより種々の感染症罹患率がコロナ禍前にほぼ復帰した一方で、出生数減少を背景にした地域小児人口減少や定期接種の漸次拡大が要因の一つと思われる。しかしながら、今後数年はコロナ禍中に種々の感染症を経験しなかった感受性乳幼児が新たな暴露機会に晒されるなど(年長児のロタウイルス感染罹患増加、学童の百日咳罹患増加など)、一般小児診療の中心は従前の急性感染症診療であることには大きく変わらないと思われる。当科においては外来診療及び救急診療対応を出来るだけ充足し、地域開業小児科とも密接に連携しながら、地域の流行状況に応じて、急性感染性疾患の外来入院診療受入れを充実させていく所存である。

来年度以降の課題として、常勤医師・専攻医確保によるマンパワー充足であるが、当院で専攻医研修を修了、専門医資格を取得、更にsubspecialityを深めた人材に再就職を呼びかけるのが解決策であるが、十分に達成されているとは言い難い状況である。近年、基幹病院の一つである大阪大学小児科専攻医研修プログラム希望者が大幅に増加しており、泉州南部圏域において当科の診療規模拡大を図るために数年以内での漸次増員をご提案頂いている。

人員充足が満たされるまでは、臨床アクティビティ維持、学会・研究会・論文等で積極的な業績発信、大阪大学及び大阪公立大小児科専攻医研修プログラムの補完施設として新生児医療と一般小児診療をバランスよく研修できる施設として後進の指導に励むことである。

表1 夜間休日小児救急輪番受診児数(2025年度)

	2次救急(17～23時)	1次救急(23時以降)	計
受診児数	45	127	172
救急車搬送	38	15	53
紹介児数	6	0	6
入院児数	6(13.3%)	4(3.1%)	10(5.8%)

表2 入院児主診断名

01 感染症及び寄生虫症	18
RSウイルス感染症	7
ウイルス感染症	1
ヒトメタニューモウイルス感染症	1
細菌感染症	2
ロタウイルス性腸炎	1
感染性胃腸炎	2
B群溶連菌感染症	1
急性胃腸炎	2
ノロウイルス性胃腸炎	1
03 血液及び造血系の疾患並びに免疫機構の障害	2
急性化膿性リンパ節炎	2
04 内分泌、栄養及び代謝疾患	3
成長ホルモン分泌不全性低身長症の疑い	2
低身長症	1
06 神経系の疾患	2
交感神経緊張亢進急性増悪	1
急性細菌性髄膜炎	1
10 呼吸器系の疾患	46
RSウイルス細気管支炎	5
RSウイルス肺炎	2

ヒトメタニューモウイルス肺炎	6
気管支肺炎	5
急性気管支炎	3
急性上気道炎	4
細菌性肺炎	1
小児肺炎	3
小児喘息性気管支炎	1
喘息性気管支炎	4
喘息性気管支肺炎	1
乳児肺炎	2
小児喘息	1
慢性気管支炎	1
気管支喘息発作	2
小児急性副鼻腔炎	1
急性咽頭扁桃炎	1
MRSA肺炎	1
インフルエンザ	1
ヒトメタニューモウイルス細気管支炎	1
12 皮膚及び皮下組織の疾患	2
膿疱疹	1
顔面蜂巣炎	1

13 筋骨格系及び結合組織の疾患	11
川崎病	2
不全型川崎病	9
14 腎尿路生殖泌尿器系の疾患	6
急性腎盂腎炎	1
尿路感染症	4
左急性腎盂腎炎	1
16 周産期に発生した病態	8
新生児感染症	1
赤血球増加症による新生児黄疸	6
哺乳不全	1
18 症状等で他に分類されないもの	1
熱性痙攣	1
19 損傷、中毒及びその他の外因の影響	3
食物によるアナフィラキシー	1
急性薬物中毒	1
食物アレルギー	1
総計	102